〔著者略歴〕

串田孫一　一九一五年、東京に生まれ、一九三九年、東大文学部哲学科卒業。現在、東京外国語大学教授、専攻は哲学、仏文学。著書に〔苦悩と思索〕（角川書店）〔若き日の思索のために〕（筑摩書房）〔哲学と人間愛による思索〕（河出書房）〔フランス思想史〕（春秋社）〔若き日の人生ノート〕（学生社新書）など。

島崎敏樹　一九一二年、東京に生まれ、一九三七年、東大医学部卒業、現在、東京医科歯科大学教授。専攻は精神医学。著書には〔盛情の世界〕（岩波新書）〔心で見る世界〕（同上）〔自然と心〕（岩波写真文庫）〔病める人間像〕（ミリオンブックス）〔訳書にはヤスペルス〔精神病理学総論〕（上・中・下）（岩波書店）〔ランゲ・アイヒバウム〔天才〕（みすず書房）など。

青春の自画像　¥250.

1961年5月5日　第1刷印刷
1961年5月10日　第1刷発行

著者　串田孫一（くしだまごいち）　東京都小金井市小金井 2328
著者　島崎敏樹（しまざきとしき）　東京都新宿区百人町4の450 公務員宿舎 RB 4ノ1

発行者　鶴岡正美　東京都新宿区矢来町 38

印刷所　株式会社精興社　東京都千代田区神田錦町3ノ9

発行所　株式会社 學生社　東京都新宿区矢来町 33　振替・東京 18870 番

渡辺製本株式会社・製本　　落丁・乱丁本はお取替えします

青春の自画像

串田孫一
島崎敏樹

まえがきにかえて

往　信

島崎敏樹

この秋、信州へいってきました。仕事のこともありましたし、それよりも、本当は「行きたかった」ためもあるかもしれません。碓氷峠をのぼってゆくアプト式の線は、のろのろしているために近ごろ大層評判がわるいようですが、横川からしずしずとのぼるあの斜面は前々から好きです。今度の旅などは、ちょうど紅葉の季節でしたから、窓の外の林の赤と向い側の山腹の森の深い青が互にひきたてあっていましたし、黒くよどんだ沼も眼下にあらわれたりしました。この線は人を退屈させるのろのろなどでは決してないと私はあらためて思いました。さっさと通りすぎて行ったら、あの景観は心に刻印されずにぬけてしまうでしょう。自然のままに感情が流れてゆ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

く、その流れの速さが碓氷をのぼる汽車の速さに合っているのだろうと思います。

そんなわけで、自分の気持を向うへ合わせてゆけば、汽車の長旅でも心のやり場のない退屈なものではないらしく、串田さんが前にかいておいでのように、週刊誌などで時間をつぶしながら、どろりとなった頭で汽車の旅をするのは本当にもったいないことだと思います。ただ残念ながら、ポケットの底からちびた4Bの鉛筆をひろいだして、ひらいたスケッチブックに山稜の線を黒くひいてゆくあのたのしみ――たのしみの味は十分想像できるのですが、能力の方がさらにない私には、心の画帖に風物を写しとっておくしかありません。

そうした心の画帖も私なりに大分ためました。風物もそうですが、したしんだ人たちの画像もなかにはありますし、自分自身の像というとむずかしいですけれども、中学に入りたてで、少々だぶついたあたらしい服を着せられてこちらに向って照れている私の像も、画帖のずっと前の方にぽつりと入っています。

そのころの私から、今の私になるようになった年月をとおして一体何があったのだろう。凝結だ、荒涼だ、氷だ、そして精神だ、そして芸術なのだ――トーマス・マンはそうなげきましたが、私の場合、精神だとはひょっとしたら申せても、芸術の方はけずらなくてはなりません。そのか

わりにひとつ、「そして彷徨なのだ」といれたら、私なりの感慨になりそうです。

実はこの本のなかで私が書く分に、「漂泊について」というのをいれるつもりでいました。旅の漂泊のことでもありましたし、心の漂泊をそのなかになげこもうとも思っていました。そしてこの項目はたのしみに一番あとまでしまっておこうとひそかに思いました。執筆していたのがちょうど真夏でしたから、さすらうにはまるで不向きな季節です。陽で肌をやきこみ、どろどろの汗に漬っていては、漂泊の心の世界はひらいてくれません。ひとつ秋に入ったら旅にでよう——そう考えてたのしみにしていました。

ある日、私は書棚から一冊本をぬきだして、ちょうど気晴らしの散策をするような気持で、たまたま指が勝手にひらいたページをよみだしました。そうしたら、彷徨はかまわないが漂泊はいけないといった趣旨のことばにすぐさまぶつかってしまいました。

それは若い人たちへ向けたことばでしたが、心がつまずいたとでも言いましょうか、私はぎくりとなりました。古い高等学校の学生のころ、まだ邦訳が見あたらなかった時代、ドイツ語でよんでひきこまれてしまったヘッセの「クヌルプ」のことがおもいだされました。あとで日本訳がでて、「漂泊の魂」という名がついていましたが、作者の分身である若者の運命をおもいだすと、

それは「遍歴」というにも、「彷徨」というにもあたらぬ、亡びて大地にかえる人生でした。

遍歴ならば、つみかさねのあとに分厚な人間ができあがるでしょうし、彷徨の方はさまざま迷った果に自分を見つけだすでしょう。やはり漂泊はいけないのだ——少々辛い気持で、私はこのことをかいた著者は一体だれなのだろうと表紙をもどしました。著者は串田さんでした。

そんなことで、私の青春の自画像を脇にすえて眺めながら、自分なりのタブローを画こうと内内考えていたもくろみは挫折したのです。

でも、真実のことを書くときには、だれでも自分なりのものしかだせませんし、それだけに、何をかいたにしても筆者の全生涯がいわばひとつひとつのテーマを溶かしこんでいる溶媒となって、書いたものにゆきわたっているのでしょう。青春画像でなしに今の私の足場でかいても、ことは一つのところにおちつくのだ、そんな気持です。

信州の山辺からの帰り、列車に乗ってまもなく日がくれました。烏帽子の突先きだけに雪があるのがそれでも見わけられましたが、あとは暗くなりました。もう心でかくスケッチもだめです。まわりが明るいあいだ、私どもの心の眼は外向きになっていて、自分のぐるりのものに眼をくばっていますが、暗がりになってくると、外向きの心がたそがれて、なんと言いあらわしますか、

内心のリズムとでもいったものがよびだされるようです。
私はヘンデルのソナタをあつめた小スコアをとりだして、これで時をすごすことにしました。フルートソナタのト短調、ロ短調などの旋律を口のなかで吹きながしているとたのしいものでした。ト短調は前にお宅できかせて下さったものではなかったでしょうか。そのうち静かな晩にまたききたいものと思いました。

返　信

串田孫一

楽しみにお待ちしていたお手紙を頂いて、嬉しく存じます。実は私も今旅から帰って来たところなのですが、急行や準急が沢山走っている東北線を、わざわざ普通列車を選んで戻って来ました。小さい駅に十分、十五分と停車しながら、急行に追い抜かれて行くこの列車は、嘘のように

すいていましたし、時々乗り込んで来るのは、ひと駅かふた駅先で降りて行く土地の人たちばかりです。

おばあさんがふたりで、村の人たちの嘘ばなしだの、自分の家のお嫁さんのことだの、頼んだのではなかなか聞かせてはもらえない話をしていました。たっぷり訛りのある言葉のそんな話を、外の景色を眺めながら聞いているのは、鈍行旅行者の楽しみの一つです。

雪がはげしく降っている日に、南会津の山地を歩いて来ましたが、その辺は私にとっては全く未知のところで、バスがどの辺まで入っているのか、行きついた部落に泊るところが果してあるかどうかも分らず、その先々で、行き交う人に道や土地の容子を訪ね訪ね歩いて行きました。今は観光の客を呼びよせようという気持が地方の人たちにはかなり露骨に見られますし、ガイド・ブックも沢山出版されていますから旅行の前にその地方の事情を調べることは簡単に出来ますが、私は、それらのガイド・ブックの、親切なというよりはおせっかいな書き振りを見ていますと、押しつけがましさや無責任が腹立たしくなって、そんな本に書かれていない土地をさがして行きたくなるのです。

私は世間のおせっかいが半年ほど前からいやに気になって仕方がありません。広告宣伝の文句

にしてもそうですか、親切とからみ合ったおせっかいはどうにも我慢が出来ず、他人に対しては、少くも自分だけは出来るだけ控え目になっていようと思うようになりました。未知の土地を知ろうとしてガイド・ブックを開いてみました時に、「AからBまでは何キロ、バスも通っているが歩けば何時間……」という書き方ならばこれはありがたいと思います。ところが、「Aに来たならばそこに一泊、湖に臨んで特に景色のすぐれているBを見落したくないものである……」と言われますと、私はすなおにそれを聞き入れにくくなってしまいます。少々ひねくれてしまったのかも知れませんが、そういうおせっかいに馴れるのは恐ろしい気がするのです。

乱暴な言い方かも知れませんが、若い方々のうちに、自分で未知のところへ這入って行く気持がなくなって、案内書のとおりにしか歩けなくなってしまう人が多くなったらば、これは困ります。

私は、自分の歩きまわった場所については求められれば幾らでも詳しく話したい気持がありますけれども、それぞれ異った条件のうちにいる他人に対して、自分の経験からこうしろああしろという風に押しつけがましいことを言うのは控えなければならないと思います。

お手紙の中に、漂泊と彷徨のことが出て来ましたので、私は狼狽いたしました。実はそのこと

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

で以前に、こじつけを書いたことがいつまでも気になっていたからです。ここでそれをもう一度持ち出しては泥臭くなりますから、逃げることにいたしますが、そちらの青春の自画像を挫折させてしまったとなると、いよいよ責任を感じます。

私も実を申しますと、山の頂上に立つこととか、峠を越えるとか、何か目的を決めて出かけることにはしますけれど、目的が途中で変更されたり、なくなってしまうことが多くて、帰って来て自分の旅を振りかえれば、結局は彷徨ではなく漂泊になっている場合が多いようです。恐らく私の生涯も彷徨でありたいなどと言いながら漂泊になっていると思います。

そうなりますと、やっぱりそんな区別などはどうでもよくて、時にはさまよい、時にはさすらっているのが実際のように思われます。ただいずれであるにしても、私は、案内書どおりにしか歩けない人間、歩くのではなくてただ運ばれて行く人間にはなりたくないと思っています。

ケーブルカーとか、ロープウェーが山にどんどんつくられます。歩けば三時間も四時間もかかるところを、十五分か二十分で行けるのですから乗らないのは愚かな人間になります。それに疲れませんし、歩いていては見られない景色が見られます。しかし山の中で傍らからそれを見ていますと、いかにもただ運ばれて行く姿があわれで、私は乗るまいと思ってしまいます。

楽に早く、しかも自分を何かに托して目的地へ着くことばかりを人は考えるようになってしまいました。通過する駅の名前も読みとれない程のスピードを出して行く特急列車の中で、私はいらいらしはじめますが、周囲の人はやっぱり退屈しているようです。

必要があれば便利なものとして、ケーブルカーでも特急でも人生案内の書物でも利用させてもらいますけれども、それがなければ動きがとれない人間はどうもあわれに見えて仕方がありません。

バスがあるのにもそれに乗らずに歩いたり、急行が出ているのにわざわざ鈍行に乗ったりするのは、ひねくれでもあると同時に、これは大変贅沢なことのようにも思われます。しかし、とがめられる種類の贅沢でもないと思っています。

それを得意になってはそれこそ滑稽でしょうけれど、人生の道も多少ひねくれながら、意固地になるところはなって、しかも自分らしく歩いて行けたら、これは案外おもしろそうだと、つい最近、四十五回目の誕生日の晩にぼんやりと考えました。

近くお目にかかれる機会も出来、また楽しみが出来ました。御一緒に笛を合わせて頂いて、その音色を、吹きながらゆったりとした気持で自分で聞けるようになっておきたいと思います。

返　信

目

次

まえがきにかえて
往　信……島崎敏樹…三
返　信……串田孫一…七
青春の自画像……串田孫一…一七
心の遍歴……串田孫一…二五
思索の意味……串田孫一…三三
懐疑について……串田孫一…四一
愛のモラル……串田孫一…四八
恋愛について……串田孫一…五五
友情について……串田孫一…六二
若い情熱……串田孫一…六七
自然の美しさ……串田孫一…七六

人間の美しさ……串田孫一…八三
ユーモアと人生……串田孫一…九一
幸福について……串田孫一…九八
孤独の部屋……島崎敏樹…一〇五
心の淵……島崎敏樹…一一三
冒険へのいざない……島崎敏樹…一二三
愛のない時代……島崎敏樹…一三三
閉じた愛……島崎敏樹…一四二
感受性について……島崎敏樹…一五三
傷ついた心……島崎敏樹…一六二
書斎の人……島崎敏樹…一七〇
エゴイズム……島崎敏樹…一八三
趣味について……島崎敏樹…一九一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb